

コーディネーター： 澤田 稔（上智大）

コメンテーター： 加藤 幸次（会長）、玉置 崇・宮川 啓一（岐聖大）

この分科会の趣旨

自明のことであるが、一斉指導学習においても、個々の子どもたちの学習は個別に成立している。

たとえば、ひらめきに優れたり直感力の鋭い子どもは、教師の説明を待つまでもなく、すでに教師の意図する学習を成立させている。逆に一斉指導学習の教師の説明と進度に思考が追いつかず、その時間の学習は成立していなくても、次時には新しい学習が展開されていく。また子どもが興味関心を示す教育媒体、あるいは課題に対して取り組む態度等、そこには様々な個人差、個性が存在する。

つまり子どもたちを学びの集団としてとらえる、一斉指導学習指導だけでは真に個に応じるためには、自ずと限界があるのである。

そこで、教師が教えるから学習が成立するのではなく、子どもは自らの経験や自らの認知のスタイルで、あるいは自らの意思で学習を成立させていく存在であるととらえると、学習指導はどうあるべきかの本質が見えてくる。実は教えないのが教師の仕事であるとも言える。しかし、教師の仕事は教えることにあるとの思いにとらわれていると、教える側の論理から学習指導を展開し、個別化学習（習熟度別学習 等）をすることで個に応じた指導をしているとの思いに留まってしまうことになる。

学ぶ側の論理に立って学習指導の在り方をとらえ直す、つまり様々な個に応ずるための学習指導を、学び手である子どもたちの側から見つめ直すための指導実践はどうあるべきかをさぐるのが本分科会である。

岐阜聖徳学園大学附属小・中学校では、個に応ずる手立ての一つとしてパッケージ学習を実践してきた。また公立学校においても赴任先が変わってもずっと実践を積み重ねている指定発表や、個が生きるための教科学習以外の手立てや、学校以外での実践発表をとおして議論を深めていきたい。